

行った。16ヵ月経過後の所見では、インサート周囲にはクレビスはなく、臨床上は全く問題なく経過していた。

【考察】間接修復と比較し、口腔内での形態修正に困難を要するが、セラミックスの性質をいかした機能と審美性を即日に回復できる点で有効だと思われた。16ヶ月経過所見では、レジンとインサートの界面は臨床的には全く問題のない状態であった。

【結論】機能的回復を目的とした修復において、セラミックインサートは有用であると示唆される。

17) 歯周サポート治療の間隔とリスク項目の関係について

○鈴木 史彦, 中島 大誠, 宮尾 益佳
今村 恭也, 塚本 康巳, 石橋 由臣
中山 大輔, 江口 和彦, 岡本 浩¹
(奥羽大・歯・歯科保存, 附属病院¹)

【目的】演者らは歯周疾患の継続的リスクを評価するために、機能的ダイアグラムを用いた報告を行ってきた。今回は第3報として、低・中・高リスクグループごとに歯周サポート治療(SPT)の間隔が異なっていると、機能的ダイアグラムのリスク項目に差を生じるのかを評価した。

【方法】被験者は奥羽大学歯学部附属病院総合歯科に来院し、歯科保存学講座歯周病学分野の医局員が担当したSPT患者205名とした。診査項目はプロービング時の出血(BOP)の割合、4 mmを超えるポケット(PD> 4 mm)が残存している部位数、全28歯からの喪失歯数、患者の年齢に対する骨吸収量、全身・遺伝因子としてaggressive periodontitisの有無や糖尿病の状態、環境因子として喫煙の有無や本数とした。

【結果】低リスクグループではSPT間隔3ヵ月のものが、1ヵ月のものと比較してBOP%やPD> 4 mm部位数が少ないものの、すべてのリスク項目で有意差はみられなかった。中リスクグループではSPT間隔2ヵ月と3ヵ月の間で喪失歯数に有意差がみられた(10.5±1.5本と6.4±0.8本)。しかし、他のリスク項目は有意差がみられなかった。高リスクグループは低・中リスクグループよりも数値が大きくなっているものの、

SPT間隔3ヵ月のものが、1ヵ月のものと比較してBOP%やPD> 4 mm部位数が少ないといった傾向に違いはみられなかった。BOPが中リスクカテゴリとなる、9%を超える被験者を抽出した場合や、SPTの継続年数が3年目以上の被験者を抽出した場合であっても同様の結果となった。喫煙者やコントロール不良な糖尿病患者の割合は、それぞれのSPT間隔で同様の傾向を示した。

【考察】術者はBOP%が少なく、PD> 4 mm部位数が少ないと、経験的にSPT間隔を3ヵ月にする傾向にあった。しかし、どのような条件であれ、中リスクグループの喪失歯数を除外し、1~3ヵ月の間でSPT間隔の違いによるリスク項目の差はみられなかった。すなわち、高リスクだから1ヵ月ごと、低リスクだから3ヵ月ごとといった規則性に当てはめる必要はないと考えられる。

【結論】SPTを継続すること自体が重要であり、1~3ヵ月の間でSPTの間隔は大きな影響を及ぼさなかった。